

明日香をさぐる

甘櫛丘遺跡群の調査

令和7年度に行いました甘櫛丘遺跡群の調査を中心に、出土した木簡について紹介します。

甘櫛丘遺跡群は甘櫛丘の東側、大字豊浦にある谷が入り組んだ地形のところ広がる遺跡です。明日香村教育委員会文化財課が令和2年度から発掘調査を始め、令和7年度の調査で6年目となりました。甘櫛丘遺跡群の調査事業も佳境を迎えていて、調査成果もまともりつつあります。今回は令和7年度の調査成果を中心に、これまで見ていきたいと思えます。

令和7年度の調査では、掘立ての塀跡が直角に曲がることを確認しました。この塀跡は敷地を区画するためのもので、塀の内側には建物の柱穴がたくさんありました

が、塀の外側には柱穴がわずしかありませんでした。これらのことから、塀を境に敷地が分かれていたことがわかります。これまでの調査によって、この区画内には掘立柱建物2棟、大型方形井戸1基が確認されています。2棟の建物は、総柱建物という構造の建物で、柱一間ごとに格子状に柱を立てた倉庫のような建物です。2棟の敷地面積は、ひとつが約9㎡、もうひとつが22㎡で、当時の倉庫跡と比較しても小規模です。

大型方形井戸は深さ約2mで、井戸の掘形を含めると、平面規模は約3.5mの大きな井戸となります。これらの建物や井戸、塀な

どは、いずれも同じ方向を向いていることから、同時期の施工と考えられます。そして、井戸の時期は出土した土器から7世紀後半頃であることがわかりました。区画内に向きを揃えた配置と倉庫が2棟並ぶ状況から考えて、この場所が計画的に施工された小規模な倉庫群、または、役人の居宅に付属する倉庫であったと考えられます。

建物の性格も時期も明らかとなりましたが、では、倉庫にはいったい何が納められていたのでしょうか。この問いの答えとなるものが、先ほど説明した井戸の中から見つかった木簡です。木簡とは、加工した木材に墨で字を記したものです。見つかった木簡には「稲賜奉了」と記されていました。木簡が記している内容は、稲の授受に関することと考えられます。文字はこれだけしか残っていないので、これ以上のことは分かりません。ですが、木簡と建物の性格から想像をたくましくすると、この場所には、小規模ではあるが稲を保管していた倉庫、または役宅内にある米倉があったと考えることができます。

甘櫛丘には蘇我蝦夷・入鹿の邸宅跡があったことが『日本書紀』に

記されています。しかし、蘇我本宗家が滅んだ後の甘櫛丘については全く知る術がありませんでした。ですが、これまでの発掘調査をまとめると、蘇我本宗家が滅んだ後も甘櫛丘は活発に土地利用が行われていたことがわかりました。そして、今回のように木簡が出土したことによって、甘櫛丘の性格と役割がより鮮明となったといえます。今後も甘櫛丘遺跡群の調査は続きます。あらたな調査成果にご期待ください。



▲木簡の出土状況

【明日香村教育委員会文化財課】